

# 余市町でおこったこんな話

## 余市町でおこったこんな話その148

余市町の埋もれた歴史等を紹介し、改めて余市町を再認識するコーナーです。

### ニシン粒買いと身欠の二本採り

明治、大正と好調だった余市のニシン漁は、昭和に入って凶漁の年が見られだしました。昭和10(1935)年には漁獲が無く、翌11年も同様な不漁でした。凶漁が地元経済に与える打撃は大きく、水産加工業、鉄道や馬車の運輸業、製造業などさまざまな業種にその影響が及び、それまでの「とる漁業」から脱却して、原料魚をよそから買い入れて加工する方針へと転換しなければならなくなりました。

同11年5月12日午後8時から、沢町の劇場エビス座を会場にして、余市練加工組合が主催した町民参加の決起大会が催されました。大会では沿海州など沖合漁業への転換、冷蔵庫の建設、余市漁港の早期完成、ニシン加工への転換が叫ばれました(『余市漁業発達史』)。

先行きが見えないままその年は暮れて、翌12年1月25日、沢町の料亭敷珍に地元加工業者60名が集まりました。原料魚を買い入れて加工する体制を確立させようと、ニシン3万石の買入れと先進地岩内町の視察を決めました。

生ニシンを買い入れて運搬する船を「粒買い船」と言い、余市の加工業者がチャーターしたのはいくつか青森県八戸の船でした。4、5日間でチャーター料7、8千円から1万円位で、中略：戦前までは、利尻、天売、礼文、焼尻から、西樺太へ行ったが、終戦後は西樺太へは行けなくなったので、北見まで行った。」とあります(山本繁太郎談、形態を変えて戦後も続きました)。

昭和10年中頃の新聞報道を見ると、「加工余市」への転換に成功し、岩内に次ぐニシンの移入地になったという記事が見えます。身欠の加工方法にも改良が加えられました。身欠14年の小樽新聞には、「身欠の集約加工二つ採りを奨励」とあります。「普通身欠は魚体一尾から一本の身欠練を採るのみで残りの半身は胴練として肥料又は飼料とするのみで貴重な魚体利用上遺憾とされてきたが二つ採身欠練は一尾の魚体から二本を採るもので：後略：」と見え、こうすると魚肉の大部分が身欠となつて、一本採りよりも価格上有利となるとあります。記事には「余市水検派出所 松本石蔵」の名前があります。現在、私たちが普通に食べている身欠ニシンが、この記事でいう二本採りされたものです。が、当時、水産加工品の検査業務を担っていた松本石蔵さんが、地元業者向けに身欠の二つ採りを奨励したものが始まりだったのでしようか。記事には続けて、二つ採りは大正5(1916)年頃には既に寿都町など南後志で行われていたこと、昭和11年から余市で「骨付生身練」として始まって、後に改良されたともあります。

留萌市でかつて仲買人をされていた方に聞き取り調査を行なった際、二本採りになったのはいつからなのかとお聞きしたところ、「一匹から二本採れって余市に言われて変えたんだ」と言われたことを思い出しました。

同28年の『水産月報』第49号では、北海道水産物検査所の検査員の本採りが混在していることが指摘されています。現在のようにならぬよう規格が揃うのは後になってからのようです。



《写真：身欠製造(奥寺漁場)》

## 平成27年 国勢調査 確定値が公表されました。(総務省統計局)

調査へのご協力ありがとうございました。平成27年10月1日を期日として行われた「平成27年国勢調査」の集計結果のうち人口等基本集計(人口・世帯数の確定結果)が次のとおり公表されましたのでお知らせします。なお、詳細につきましては、総務省統計局 <http://www.stat.go.jp/data/index.html> からご覧ください。

この国勢調査の結果は、国籍や余市町への住民登録の有無にかかわらず、平成27年10月1日現在で余市町内に実際に居住するすべての人及び世帯を対象として調査したものです。また、毎月「広報よいち」でお知らせしている「よいちの人口」は、余市町に住民登録をしている人や世帯の数で、実際に余市町に住んでいても住民登録がされていない人は含まれていません。

### 余市町の人口と世帯数(平成22年~平成27年)増減

	平成27年	平成22年	増減
総 人 口	19,607人	21,258人	△1,651人
男	9,063人	9,778人	△715人
女	10,544人	11,480人	△936人
世 帯 数	8,769世帯	9,051世帯	△282世帯

### 参考 平成27年10月1日における国勢調査と住民登録人口の比較

	平成27年国勢調査の人口等	住民登録の人口等
総 人 口	19,607人	19,966人
男	9,063人	9,231人
女	10,544人	10,735人
世 帯 数	8,769世帯	10,173世帯